

伊藤俊一(監修)
隈元庸夫・久保田健太(編集)

PT・OTのための測定評価 DVD Series 6 整形外科的検査

評者 青木一治
(名古屋学院大学リハビリテーション学部)



Lasègue Test は Ernest Charles Lasègue(1816～1883)が1864年に自身の論文に記載したが、その詳細は弟子である Par J-J Forst の学位論文「DE LA SCIATIQUE」(1881年)で提出させた。Lasègue Test の原法は、まず SLR テストを行い、次いで膝関節を屈曲(bent-leg-raising)させて疼痛のないことを確認する。この2つの手技により、股関節や筋群の疾患ではなく、下肢伸展に伴う腰部神経根の伸展による症状であることが示される。しかし、現在行われている Lasègue Test は股関節 90° 屈曲位からの膝伸展により、陽性か陰性かの sign として確認されている。SLR テストにおいても、本来は下肢伸展位での挙上角度とその症状の記載により表記されていたが、陽性・陰性の表記が市民権を得ているようである。

整形外科徒手検査の目的は疾患を把握するためのものとされている。しかし、先に述べたように、検査法も時代に応じて変化している。編者の序文にもあるように、「その多くは、最初に発表した医師をはじめとした医療者の名前や運動の名称がテスト名となっており、同じテストでも別名が用いられることもあります」とある。一つひとつの検査法について吟味していればこそその発言と受ける。発案者の考えとは異なったテスト法にその名称が使用されていることもしばしばある。しかし、そのような変化はその疾患をより精度高く判断できるよう進化したものと考え、Door A Kemp らが1950年報告した Kemp Test は、外側椎間板ヘルニアに用いるテスト法として考案された。現在

では外側陥凹部の脊柱管狭窄症の検査としての有用性が高い。また、手根管症候群で用いられる Phalen Test も Phalen 自身は The Wrist Flexion Test として考案したものであったが、Phalen の本来のテストでは誘発が弱く、現在の肘を張って十分手関節を掌屈させたほうが誘発しやすく、名前だけが残ったテスト法である。

このように整形外科的検査はその異常所見の意味、疑うべき疾患とその関連性を理解していくうちに発展・進化してきた。評者の学生のころは、検査法は頭ではわかっている、臨床実習では見よう見まねで苦勞したことを記憶している。本書は DVD シリーズの6作目ということで、実際のやり方を知らない学生にとっては具体的な手技、方法、何を目的としているのか理解しやすいものとなっている。DVD 画像については、対象が健常者のため出現すべき症状、現象の理解は難しいかもしれないが、手技としての理解はできるはずである。臨床実習に出て実際に疾患に触れ、出現する症状、現象が確認できたときの感慨はひとしおであろう。本書は脊椎を専門とする先生方の豊富な臨床経験をもとに構成されており、臨床実習前の学生はもとより、疾患に対する検査法を現場で用いたことがない臨床家にとっては助かる一冊ではないだろうか。

● B5 判, 120 頁, DVD35 分, 4 色刷
定価: 本体 3,800 円+税
三輪書店刊, 2014 年